



323号室の探偵

1月13日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

1月13日のおはなし「323号室の探偵」

客室清掃係の女、ベッドサイドテーブルの上に置かれた
小さな革張りの手帳をのぞきこんでいる。
その様子をホテルのボーイが、食い入るように
見つめている。ボーイは様子を見計らって声をかける。

男「どう？」

女「ん？」

男「やばいでしょう」

女「は？」

男「探偵しよう」

女「何を？」

男「わかりませんか」

女「だから何が」

男「ほら、明らかでしょう」

女「明らかって？」

男「殺意があるでしょう」

女「殺意？」

男「『くたばっちまえ』。はっきりそう書いています」

女「あんたねえ」

男「やばいですよ」

女「やばいって？」

男「新郎」

女「新郎？」

男「殺されますよ」

女「ちょっとあんたねえ」

男「はい」

女「考え過ぎ」

男「考え過ぎとは」

女「誰も殺意なんて持ってないし、誰も殺されない」

男「でも犯行声明が」

女「これは日記。お客様が置き忘れた日記」

男「でも確かにこのとおり犯行声明が出てるから」

女「犯行声明って言うのは、テレビ局とか、新聞とかそういうのに『こうこうこうやっておれが殺した』とか言って送りつけるやつのこと。これはただの日記。誰に読ませる気もないの」

男「現に我々がこうやって読んでいるじゃありませんか……」

女「あんたさ、この人に読んでくれって頼まれたの？」

男「頼まれません」

女「勝手に読んでるんでしょ？」

男「……でもですね」

女「でもじゃなくて」

男「た、探偵しなきゃ」

女「探偵なんてしないの」

男「やばいですって」

女「お客様の忘れ物の日記を勝手に読んでるあんたの方がよっぽどやばいよ」

男「え？ やばいですか」

女「そうだよ」

男「そうですか」

女「だから早く連絡とってあげなって」

男「連絡？ 新郎にですか！」

女「はい～？」

男「殺されるから、気をつけろって」
女「違うでしょ！ こ、の、ひ、と。夕べここに泊まった女の人」
男「どうして、女の人だってわかるんですか？」
女「ええ？ ああもう、イライラする。何であんたはいつも！」
男「すみません」
女「あやまんなくていいから。いい？ だってこれね、書いてあるでしょ？ お嫁さんのことを、『この人ね貴方の愛した人は』ってね」
男「古田さんって男の人ですよ」
女「ああ？」
男「ここに泊まったの、古田さんって男の、男性の、男の人ですよ」

女、もう一度日記を手にとろうとして、
思わずテーブルの上に積み上げてあった
補充用の歯ブラシの束を落とす。
男、散らばった歯ブラシを見つめながら言う。

男「三十四」
女「え？」
男「いえ」
女「三十四？」

女、はっと気がつき、
歯ブラシを拾い上げながら数え始める。

女「……十、十一、十二、十三、十四、十五。（間）あれ？」

女、男を見上げる。
男、顔を背け女と目を合わそうとしない。

女「十五本だよ」

男、目をそらして答えない。

女「全然違うんだけど」

男、口元に手をやり、肩を震わせる。

女「（男が笑っているのを見て）えーっ？ えーっ？ ちょっと なにそれ？ 笑ってんの？
どういうこと？」
男「十九も違った」
女「十九？」
男「三十四と、十五。十九も違った」
女「？……ああ」

女、ため息をついて近くの椅子に座る。

女「いいわね。楽しくて」
男「はい」
女「（怒鳴る）『はい』じゃないよ！」
男「すみません」

男、ほとんど泣いている。

女「泣くなよもう。ほらいい子いい子してあげるからさ」

男、女のそばに近寄り足ともにしゃがむ。

女、男の頭を子どものかかえ、なでてやる。

男「セックスしたい」

女「いまはダメ。清掃時間の、客室ではセックスしちゃダメなの」

男「わかった」

男、立ち上がり、再び日記のそばに立つ。

女、しばらく離れて様子を見ている。

女「どんな人だったか、わかる？」

男「どの人が？」

女「古田さん」

男「探偵するの？」

女「.....そう。探偵するから」

男「うん。うん。チャペルの、新郎側の、一番うしろの席で、チャコールグレーのスーツで、白いネクタイをして.....」

(「日記」 ordered by こあ--san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

323号室の探偵

<http://p.booklog.jp/book/42162>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42162>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42162>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.